

京都国立近代美術館 収集方針

京都国立近代美術館は、関西さらには西日本において近現代の美術・工芸を扱う中心的な機関として活動することを目的とし、地域性に目配りしつつも、日本の近現代美術史の核となる作品や、代表的作家の各時代における重要作品を積極的に収集している。さらに、世界における日本の美術・工芸の位置づけを常に考えることを旨とし、その影響関係に係る国外の近現代美術の収集にも取り組んでいる。

令和2年度の作品購入についても、以上の方針を踏襲し、多様なジャンルの作品を収集した。特に今年度は、特別購入予算により、29件の岸田劉生作品を購入したことが特筆される。本作品群は岸田劉生の活動を支援し、作品を収集していた森村義行・松方三郎兄弟の旧蔵品という点で、国立西洋美術館の松方コレクションに次ぐ、第二の松方コレクションと位置づけられる。また、代表作《外套着たる自画像》や《麗子裸像》、《舞妓図（舞妓里代之像）》が含まれるだけではなく、初期から晩年の作風を網羅している点でも希有な作品群である。同時に寄贈される13点を加えれば収蔵点数は約50点となり、東京国立近代美術館の劉生コレクションに次ぐ規模となる。近代日本洋画の重要作家の核となる作品群を国立美術館で所蔵することができ、今後の研究・展覧会活動への寄与が期待される。なお令和3年度に本作品群の新収蔵記念展を企画している。

また、昨年度展覧会を開催したイタリアの現代陶芸家ニーノ・カルーソの代表作2点を購入したほか、染織家皆川月華の第14回帝展出品作《染彩繡樹下誕生屏風》や、漆芸家迎田秋悦の作品など、日本の近代工芸を検証するために必要な作品を幅広く収集し、所蔵作品全体の充実を図った。その現時点での成果を令和3年度企画展「モダンクラフトクロニクル」として公開する。ほかに河口龍夫ら現代作家の作品やソニア・ドロネーやアーシル・ゴーキーの西洋近代作家の作品を加え、収蔵品の更なる充実を図った。

京都国立近代美術館 美術作品購入一覧（令和2年度）

 = 特別予算購入																			
1	<table><tr><td>種別</td><td>： 日本画</td></tr><tr><td>作者名</td><td>： 入江波光 (1887-1948)</td></tr><tr><td>作品名</td><td>： 南欧小景（聖コスタンツァ寺）</td></tr><tr><td>制作年</td><td>： 1922(大正11)年</td></tr><tr><td>材質・形状</td><td>： 軸／絹本着色</td></tr><tr><td>寸法</td><td>： 38.0×42.5 cm</td></tr><tr><td>解説</td><td>： 国画創作協会の創立同人ではないが、同等のメンバーである入江波光。ここに描かれるのは、ローマ郊外に建つサンタ・コスタンツァ聖堂である。大正11年から12年にかけて渡欧した波光は、冬の3か月ほどをイタリアで過ごしている。当時、西欧絵画の写実的な表現を前に、日本画材の不自由さに悩んでいた作家が、現地で見たフレスコ画に大きな示唆を受け制作、手応えを得た代表作として知られる。帰国後国展に出品された。</td></tr><tr><td>取得額</td><td>： 16,500,000円</td></tr><tr><td>展示予定</td><td>： 2,3年のうちに、村上華岳《秋林》とともに紹介する特集展示を計画中。</td></tr></table>	種別	： 日本画	作者名	： 入江波光 (1887-1948)	作品名	： 南欧小景（聖コスタンツァ寺）	制作年	： 1922(大正11)年	材質・形状	： 軸／絹本着色	寸法	： 38.0×42.5 cm	解説	： 国画創作協会の創立同人ではないが、同等のメンバーである入江波光。ここに描かれるのは、ローマ郊外に建つサンタ・コスタンツァ聖堂である。大正11年から12年にかけて渡欧した波光は、冬の3か月ほどをイタリアで過ごしている。当時、西欧絵画の写実的な表現を前に、日本画材の不自由さに悩んでいた作家が、現地で見たフレスコ画に大きな示唆を受け制作、手応えを得た代表作として知られる。帰国後国展に出品された。	取得額	： 16,500,000円	展示予定	： 2,3年のうちに、村上華岳《秋林》とともに紹介する特集展示を計画中。
種別	： 日本画																		
作者名	： 入江波光 (1887-1948)																		
作品名	： 南欧小景（聖コスタンツァ寺）																		
制作年	： 1922(大正11)年																		
材質・形状	： 軸／絹本着色																		
寸法	： 38.0×42.5 cm																		
解説	： 国画創作協会の創立同人ではないが、同等のメンバーである入江波光。ここに描かれるのは、ローマ郊外に建つサンタ・コスタンツァ聖堂である。大正11年から12年にかけて渡欧した波光は、冬の3か月ほどをイタリアで過ごしている。当時、西欧絵画の写実的な表現を前に、日本画材の不自由さに悩んでいた作家が、現地で見たフレスコ画に大きな示唆を受け制作、手応えを得た代表作として知られる。帰国後国展に出品された。																		
取得額	： 16,500,000円																		
展示予定	： 2,3年のうちに、村上華岳《秋林》とともに紹介する特集展示を計画中。																		
2	<table><tr><td>種別</td><td>： 日本画</td></tr><tr><td>作者名</td><td>： 村上華岳 (1888-1939)</td></tr><tr><td>作品名</td><td>： 秋林</td></tr><tr><td>制作年</td><td>： 1921(大正10)年</td></tr><tr><td>材質・形状</td><td>： 軸／絹本着色</td></tr><tr><td>寸法</td><td>： 49.0×56.7 cm</td></tr><tr><td>解説</td><td>： 国画創作協会の創立同人・村上華岳は、六甲山をモチーフに墨を主体とした山水を描いたことで名高いが、そのような作品は、京都を離れ、国展からも離れた後に生まれたものである。大正時代は、ペン画のような描線とくすんだ色調、金属泥による繊細で写実的な郊外風景を描いていた。本作品はそのような風景画の一つの到達点と言ってよい作品で、作家のこれまでに開催された回顧展では欠かせない作品である。</td></tr><tr><td>取得額</td><td>： 16,500,000円</td></tr><tr><td>展示予定</td><td>： 2,3年のうちに、入江波光《南欧小景（聖コスタンツァ寺）》とともに紹介する特集展示を計画中。</td></tr></table>	種別	： 日本画	作者名	： 村上華岳 (1888-1939)	作品名	： 秋林	制作年	： 1921(大正10)年	材質・形状	： 軸／絹本着色	寸法	： 49.0×56.7 cm	解説	： 国画創作協会の創立同人・村上華岳は、六甲山をモチーフに墨を主体とした山水を描いたことで名高いが、そのような作品は、京都を離れ、国展からも離れた後に生まれたものである。大正時代は、ペン画のような描線とくすんだ色調、金属泥による繊細で写実的な郊外風景を描いていた。本作品はそのような風景画の一つの到達点と言ってよい作品で、作家のこれまでに開催された回顧展では欠かせない作品である。	取得額	： 16,500,000円	展示予定	： 2,3年のうちに、入江波光《南欧小景（聖コスタンツァ寺）》とともに紹介する特集展示を計画中。
種別	： 日本画																		
作者名	： 村上華岳 (1888-1939)																		
作品名	： 秋林																		
制作年	： 1921(大正10)年																		
材質・形状	： 軸／絹本着色																		
寸法	： 49.0×56.7 cm																		
解説	： 国画創作協会の創立同人・村上華岳は、六甲山をモチーフに墨を主体とした山水を描いたことで名高いが、そのような作品は、京都を離れ、国展からも離れた後に生まれたものである。大正時代は、ペン画のような描線とくすんだ色調、金属泥による繊細で写実的な郊外風景を描いていた。本作品はそのような風景画の一つの到達点と言ってよい作品で、作家のこれまでに開催された回顧展では欠かせない作品である。																		
取得額	： 16,500,000円																		
展示予定	： 2,3年のうちに、入江波光《南欧小景（聖コスタンツァ寺）》とともに紹介する特集展示を計画中。																		
3	<table><tr><td>種別</td><td>： 陶芸</td></tr><tr><td>作者名</td><td>： ニーノ・カルーソ (1928-2017)</td></tr><tr><td>作品名</td><td>： アーキスカルプチャー（セジェスタ）</td></tr><tr><td>制作年</td><td>： 1988-1991(昭和63-平成3)年</td></tr><tr><td>材質・形状</td><td>： テラコッタ</td></tr><tr><td>寸法</td><td>： (高)193.5×140.0×54.0 cm</td></tr><tr><td>解説</td><td>： 《アーキスカルプチャー（セジェスタ）》は建築的彫刻を意味するカルーソの造語で、セジェスタはイタリアのシチリア島に紀元前5世紀頃に栄えた古代遺跡のことである。セジェスタの神殿は巨大な柱が連続して構築されているが、カルーソは本作で門と柱とを一つの作品の中で融合させることで、セジェスタの神殿の要素それ自体が彫刻として屹立しうることを表現している。</td></tr><tr><td>取得額</td><td>： 7,610,400円</td></tr><tr><td>展示予定</td><td>： 2022年度コレクション展で展示予定</td></tr></table>	種別	： 陶芸	作者名	： ニーノ・カルーソ (1928-2017)	作品名	： アーキスカルプチャー（セジェスタ）	制作年	： 1988-1991(昭和63-平成3)年	材質・形状	： テラコッタ	寸法	： (高)193.5×140.0×54.0 cm	解説	： 《アーキスカルプチャー（セジェスタ）》は建築的彫刻を意味するカルーソの造語で、セジェスタはイタリアのシチリア島に紀元前5世紀頃に栄えた古代遺跡のことである。セジェスタの神殿は巨大な柱が連続して構築されているが、カルーソは本作で門と柱とを一つの作品の中で融合させることで、セジェスタの神殿の要素それ自体が彫刻として屹立しうることを表現している。	取得額	： 7,610,400円	展示予定	： 2022年度コレクション展で展示予定
種別	： 陶芸																		
作者名	： ニーノ・カルーソ (1928-2017)																		
作品名	： アーキスカルプチャー（セジェスタ）																		
制作年	： 1988-1991(昭和63-平成3)年																		
材質・形状	： テラコッタ																		
寸法	： (高)193.5×140.0×54.0 cm																		
解説	： 《アーキスカルプチャー（セジェスタ）》は建築的彫刻を意味するカルーソの造語で、セジェスタはイタリアのシチリア島に紀元前5世紀頃に栄えた古代遺跡のことである。セジェスタの神殿は巨大な柱が連続して構築されているが、カルーソは本作で門と柱とを一つの作品の中で融合させることで、セジェスタの神殿の要素それ自体が彫刻として屹立しうることを表現している。																		
取得額	： 7,610,400円																		
展示予定	： 2022年度コレクション展で展示予定																		

4	種別：陶芸 作者名：ニーノ・カルーソ(1928-2017) 作品名：エルマー両性具有 制作年：1993(平成5)年 材質・形状：陶器、釉薬 寸法：(高)168.0×46.0×28.5cm／(高)168.0×47.0×28.0cm 解説：二本の柱からなる対作品である。カルーソが得意とするパーツを結合させていくモジュラー・エレメントによるもので、発泡スチロールの原形からなる凹凸や陰陽の形状が作品の造形において重要な役割を果たしている。まさに一本の柱の前後で表情が関連性を持ちながらも変化していく様に両性が同居するイメージが展開されている。 取得額：7,610,400円 展示予定：2022年度コレクション展で展示予定
5	種別：陶芸 作者名：三代宮永東山（理吉）（1935- ） 作品名：記憶の光景 制作年：1997(平成9)年 材質・形状：陶器、釉薬 寸法：(高)150.0×113.0×22.0 cm 解説：滋賀県立陶芸の森のレジデンス期間中に制作した大型の陶による彫刻作品。大型作品に適した砂分の多い粘土が型紙を用いて成形され、コバルト顔料の吹き墨による装飾が面の中で濃度を変えて施されている。山並みなどの心象風景を幾何学的に図形化した装飾と型紙に土を押し付けた際の痕跡が理知的でありながらも情緒性を合わせ持つ、陶による彫刻世界を生み出している。 取得額：— 展示予定：2022年度コレクション展で展示予定
6	種別：陶芸 作者名：三代宮永東山（理吉）（1935- ） 作品名：空架ける光景 制作年：1997(平成9)年 材質・形状：陶器、釉薬 寸法：(高)153.0×94.0×23.0 cm 解説：滋賀県立陶芸の森のレジデンス期間中に制作した大型の陶による彫刻作品。大型作品に適した砂分の多い粘土が型紙を用いて成形され、コバルト顔料の吹き墨による装飾が面の中で濃度を変えて施されている。幾何学的に表された時空が交差していくような光景と型紙に土を押し付けた際の痕跡によって、理知的でありながらも情緒性を合わせ持つ、陶による彫刻世界が生まれている。 取得額：— 展示予定：2022年度コレクション展で展示予定
7	種別：その他 作者名：河口龍夫(1940-) 作品名：関係 制作年：1970(昭和45)年 材質・形状：出品票のコピー4枚 寸法：各25.8×36.4 cm 解説：1960年代以降、日本の現代美術をけん引してきた河口龍夫。1970年の京都アンデパンダン展出品作である本作では、出品書類（申込書、預り書、ラベル、領収書）のコピーをとり、それぞれを台紙に貼って展示作品とした。この作品で河口は初めて「関係」という言葉をタイトルに用いている。この後河口はほぼ全ての作品タイトルに「関係」という言葉を用いるようになり、本作品はその原点としてきわめて重要な作品といえる。 取得額：— 展示予定：2023年度の開館60周年に開催する1960－70年代美術を検証する展覧会に出品予定。

8	種別	： その他
	作者名	： 河口龍夫(1940-)
	作品名	： 感光
	制作年	： 1971(昭和46)年
	材質・形状	： 印画紙、自然光
	寸法	： 93.5×109.5 cm
	解説	： 1960年代以降、日本の現代美術をけん引してきた河口龍夫。1971年の京都アンデパンダン展出品作である本作では、展覧会会期中に、壁に掲示した印画紙を感光させ、時間の経過と写真の印画プロセス（光の変化）という非物質的な事象を可視化させることを試みている。1960年代後半から70年代にかけて写真・ビデオ、印刷といった複製メディアを実験的に取り入れた河口の重要作のひとつ。
	取得額	： ー
	展示予定	： 2023年度の開館60周年に開催する1960ー70年代美術を検証する展覧会に出品予定。
9	種別	： その他
	作者名	： 毛利悠子(1980-)
	作品名	： めくる装置、3つのヴェール
	制作年	： 2018(平成30)年
	材質・形状	： インスタレーション／チュール、スキヤナ、モニター、サーキュレーター、モーター、電導糸、錆びたモーター、ステンレス
	寸法	： 可変
	解説	： 毛利悠子は磁力や重力、光など目に見えない力を可視化するインスタレーションを制作し、音を用いたパフォーマンスなども手掛ける。本作は2017年度当館で開催したデュシャン《泉》に関する小企画のために構想・制作された。デュシャンの《大ガラス》を「性的エネルギーのサーキュレーション」による「電気的な脱衣」として、モーターや扇風機、スキヤナなどの機械装置と光学メディアによって再解釈している。現代美術家の視点を通して近代美術史を検証する重要な作例。
	取得額	： ー
	展示予定	： 今後コレクション展などで展示予定。
10	種別	： 染織
	作者名	： 皆川月華（1892-1987）
	作品名	： 染彩繡樹下誕生屏風
	制作年	： 1933（昭和8）年
	材質・形状	： 三曲屏風／染彩繡
	寸法	： 166.0×183.0(h) cm
	解説	： 第14回帝展に無鑑査出品した作家の代表作。中央部分の人物群を取り囲むように皆川が得意とする草木や孔雀などが配置されている。蒨緞による天然染料の淡く深い色彩を地とし、そこに金彩や刺繡を施すことで、装飾的かつ絵画的な皆川独自の画面構成となり、南国の濃密な空気感の中で誕生の喜びを見事に表現している。
	取得額	： 3,850,000円
	展示予定	： 2021年度企画展のモダンクラフトクロニクル展で展示予定。
11	種別	： 漆工
	作者名	： 迎田秋悦（1881-1933）
	作品名	： 菊御紋入鉄線蒔絵手箱
	制作年	： 明治後期～昭和前期
	材質・形状	： 木、漆、蒔絵、銀
	寸法	： 19.7×16.4×18.6(h) cm
	解説	： 木製長方形の印籠蓋で、合口には銀の覆輪が施された手箱。蓋、身ともに全面金地で、そこに金銀の高蒔絵で華麗に咲き誇る鉄線と菊の御紋が表される。一方、内側はすべて梨地によって簡潔に仕上げられている。日本画を学び、図案研究にも積極的であった秋悦らしく抑制の効いた図案に、確かな技量が発揮された作品。
	取得額	： 3,630,000円
	展示予定	： 2021年度コレクション展で展示予定

12	種別：漆工 作者名：迎田秋悦（1881-1933） 作品名：竹漆絵風炉先屏風 制作年：明治後期～昭和前期 材質・形状：二曲一隻屏風／木、紙本漆画 寸法：191.0×1.6×39.3(h) cm 解説：紙本漆画による二曲一隻の風炉先屏風。表面には笹、裏面には蕨や羊歯などの山野草が描かれている。こうした漆画は、幕末から明治にかけて活躍した柴田是真などの作例がよく知られるが、秋悦は、簡潔ながらも的確な筆致によって図柄を描き出すことで、松花堂好の華奢な風炉先屏風をより印象深いものに仕上げている。 取得額：2,750,000円 展示予定：2022年度コレクション展で展示予定
13	種別：漆工 作者名：迎田秋悦（1881-1933） 作品名：山海四季蒔絵重箱 制作年：明治後期～昭和前期 材質・形状：木、漆、蒔絵、銀 寸法：31.0×31.0×54.8(総高) cm 重箱のみ：25.0×25.0×46.0(h) cm 重台：31.0×31.0×10.0(h) cm 解説：豪華な蒔絵が施された五段の重箱で、替蓋と重台が伴っている。角の丸い正方形の形状をしており、口縁には銀で覆輪が施されている。貝や鶴、松、海などの情景が高蒔絵や平蒔絵などの技法で装飾され、蓋裏には金銀で雲に隠れる満月が描かれている。五段重という大きさもさることながら、段ごとに図が変わる図案の緻密さと密度の濃い装飾性が一際目を引く優品である。 取得額：9,020,000円 展示予定：2021年度コレクション展で展示予定
14	種別：漆工 作者名：二十代堆朱楊成（1880-1952） 作品名：稻荷山硯箱 制作年：1921（大正10）年 材質・形状：漆、彫漆 寸法：23.6×25.4×6.0(h) cm 解説：漆を何層にも塗り重ねて模様を彫る堆朱による硯箱。題材は京都の伏見稻荷大社であり、蓋表には、密集する鳥居が朱漆と黒漆で逆「く」の字型に表されている。密集する鳥居とその周囲に配された松の木が、まるで蠢く生命体のように表現され、稻荷山の神性を際立たせている。特異な意匠と鋭い彫技は、40代になったばかりの二十代楊成の気力の充実度を物語っており、『堆朱作品図録』にも掲載された代表作の一つである。 取得額：12,100,000円 展示予定：2021年度企画展のモダンクラフトクロニクル展で展示予定。
15	種別：漆工 作者名：吉田醇一郎（1898-1969） 作品名：春秋漆絵屏風 制作年：1940（昭和15）年 材質・形状：六曲一双屏風／紙本漆画 寸法：各57.5×6.0×174.0(h) cm 解説：漆画による六曲一双の屏風。日本画を学んだ吉田らしく、屏風の大画面をうまく利用して鮮やかな金地に春の桜と雉、秋の鶏頭とを描きだす。吉田は漆特有の粘性と光沢とを活かすことで堅牢な質感の画面を生み出すとともに、色漆と漆素材の透明感・光沢を効果的に用いることで、春の華やかさと秋の澄んだ情景を対比的に表現している。 取得額：7,700,000円 展示予定：2022年度コレクション展で展示予定

16	種別：日本画 作者名：上村淳之（1933-） 作品名：四季花鳥図 制作年：2017（平成29）年 材質・形状：額（二面）／紙本着色 寸法：各90.0×180.0 cm 解説：現代京都画壇を代表する日本画家・上村淳之はその最初期から一貫して鳥を描いてきたが、皮相的な美に流れ、色鮮やかであるが故に饒舌に過ぎてしまう小鳥や花は殆んど描いてこなかった。しかし、日本画が写実性と装飾性のバランスを上手くとりながら発展してきたことも熟知する上村は、60歳を超えてから、四季それぞれの鳥や花が同時に存在する空間を銀潜紙に描いた「四季花鳥図」に着手する。本作品はそこの中では最も近年の作で、鳥の種類を変え、桜の根元のみを描いて地面を意識するなど、新しい試みがみられる点が興味深い。 取得額：— 展示予定：2021年度修復予定
17 	種別：日本画 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：厨房小寒 制作年：1926（大正15）年 材質・形状：軸／紙本着色 寸法：45.9×22.0 cm 解説：京都の南禅寺草川町（京都国立近代美術館の近所）に住んだ時代の劉生の日本画で、彼の日本画の代表作。画面上部には「厨房小寒 丙寅正月於南禅寺畔劉生画人筆題」の賛文があり、1926年正月の作であると判る。日記には同年1月7日に「久しぶりで南画三枚（歳寒三友と、四時甘と、大根と蕪と蓮根との図也）かく」との記事があり、これに近い時期の作と想像されるが、むしろこの「大根と蕪と蓮根との図」が（南瓜を大根と誤ったとすれば）本作品そのものであるとも考えられる。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：2,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
18 	種別：日本画 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：蔬菜図 制作年：1929（昭和4）年 材質・形状：軸／絹本着色 寸法：127.0×37.6 cm 解説：京都から鎌倉へ移住したのちの、1929年の正月の作であるが、同年末には旅先で亡くなるので、これが劉生にとっては最後の正月となった。南画風の自由な筆致を見せているが、墨線を用いず色彩のみで描かれている点では、洋画家による日本画の中へ、改めて洋画風の表現を取り込んだような作風に変化してきているとも認められ、興味深い。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：1,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
19 	種別：日本画 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：乙女椿 制作年：1929（昭和4）年 材質・形状：軸／紙本着色 寸法：124.2×30.4 cm 解説：画中の賛文には「南國之嘉樹 昭和己巳歳春日於甲東園 劉生并題」と書かれ、最晩年の1929年、甲東園で制作されたと判る。甲東園とは兵庫県武庫郡（現在の西宮市）に芝川家が開いた果樹園であり、それに因んだ地名でもあるが、そこには劉生の弟で宝塚歌劇の演出家でもあった岸田辰弥が住んでいた。弟の家に滞在した際の作であるとも考えられる。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：1,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定

20		種 別	： 日本画
		作 者 名	： 岸田劉生（1891-1929）
		作 品 名	： 冬日小彩
		制 作 年	： 1929（昭和4）年
		材 質 ・ 形 状	： 軸／紙本着色
		寸 法	： 120.5×31.8 cm
		解 説	： 画中の賛文には「冬日小彩 塘芽堂劉生并題」と書かれ、白文「劉生」と朱文「隱世造宝」2顆の印が捺されるのみだが、劉生の大連旅行に同行した田島一郎による書付があり、それによると、大連から鎌倉への帰途、体調不良のため山口県徳山の田島家に留まった際、12月7日の朝に身の果物を描いた作品である。同月20日に亡くなる約2週間前の作で、麗子による箱書に「絶筆」と題される。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。
		取 得 額	： 1,000,000円
		展 示 予 定	： 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
21		種 別	： 日本画
		作 者 名	： 秦テルヲ（1887-1945）
		作 品 名	： 京洛帖
		制 作 年	： 1938（昭和13）年
		材 質 ・ 形 状	： 画帖（13図）／紙本着色
		寸 法	： 画帖：24.0×18.0 cm 画面：各24.0×35.5 cm
		解 説	： 秦テルヲは、昭和10年代になってから画帖形式の作品を多く描いており、白川、嵐峡、上加茂、詩仙堂、祇園、銀閣寺など京都の名所を描き画帖にしたこの「京洛帖」シリーズもいくつかのバージョンが知られている。本作品は、風景ではなく、大夫と舞妓をモチーフにした画が含まれていることに特色があり、前半生を花街の研究・描写に費やしたテルヲらしい作例と言えよう。また、これまでに知られた類例よりも1年早く描かれたものであること、テルヲの親友にゆかりのある家に伝わったものであったことから、「京洛帖」シリーズの中でも初期の優品であると考えられる。
		取 得 額	： 1,500,000円
		展 示 予 定	： 秦テルヲの特集展示で使用予定
22		種 別	： 油彩
		作 者 名	： 霰光（1907-1946）
		作 品 名	： 静物
		制 作 年	： 1942（昭和17）年
		材 質 ・ 形 状	： 額／板、油彩
		寸 法	： 31.8×41.4 cm
		解 説	： 霰光の画業において東洋の写生画への関心は早くから見られ、画業の終盤に集中する静物画には宋元花鳥画の影響が窺える。本作品もその一つだが、反面、ここに描かれた植物は実物に基づかないと見られる点で他の静物画とは異質であり、翌年の出征直前に制作された自画像3点と同じく非現実イメージの創造を志向した作例とも見られる。霰光のリアリズムの性格や変遷を考える上で極めて重要な意味を持つ作品であるといえる。
		取 得 額	： 22,000,000円
		展 示 予 定	： 2022年度コレクション展で展示予定
23		種 別	： 油彩
		作 者 名	： 岸田劉生（1891-1929）
		作 品 名	： 斜陽
		制 作 年	： 1909（明治42）年
		材 質 ・ 形 状	： 額／画布、油彩
		寸 法	： 45.5×33.1 cm
		解 説	： 劉生の修業時代の作品としては多数の水彩画があるが、油彩画は数少なく、本作品はその代表作として知られてきた。この前年から葵橋の白馬会洋画研究所で絵を学び始めていたこともあり、明るく軽やかな色彩表現には黒田清輝からの影響が窺える。裏面の墨書によると、同年3月に制作した《初春の野辺》を潰して5月に本作品を制作したと判明し、興味深い。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。
		取 得 額	： 15,000,000円
		展 示 予 定	： 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定

24		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : 風景 制作年 : 1909 (明治42) 年頃 材質・形状 : 額／板、油彩 寸法 : 32.5×23.0 cm 解説 : 路面を照らす陽光の明るさが印象深く、白馬会洋画研究所に外光派を学んだ初期の画風を伝えるが、1909年5月の《斜陽》と比較して、色調はやや重厚、筆致もわずかにばかり大胆になっている点には、黒田清輝との接触を嫌っていたらしい劉生なりの、その影響を脱しようとしていた気配も見て取ることができる。現存作例の少ない初期の油彩画の一つであり、修業時代における画風の変化を窺わせる貴重な作例である。 取得額 : 10,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定
25		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : 明治末年築地居留地 制作年 : 1911 (明治44) 年頃 材質・形状 : 額／画布、油彩 寸法 : 32.7×44.7 cm 解説 : 銀座に生まれた劉生は築地の風景を好んで絵にした。築地は、もとは武家が住んだ地域だったが、明治以降は外国人居留地も設置され、最先端の西洋風の街ともなった。劉生が幼少から親しんできたその異国情緒ある景観が、ここでは華やかな色彩と大胆な筆致で描かれている。1911年、雑誌『白樺』を読み始めてポスト印象派の絵画に感銘を受け、影響を受け始めた時期の代表作。劉生の愛娘の麗子が高く評価した作品でもある。 取得額 : 20,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定
26		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : 夕陽 制作年 : 1912 (明治45) 年 材質・形状 : 額／画布、油彩 寸法 : 32.0×41.0 cm 解説 : 1911年、劉生は文芸誌『白樺』に図版として掲載されたポスト印象派の絵に魅了され、特にゴッホからの影響を強く受けた。中でも強烈にゴッホからの感化を伝えるのが翌年の本作品である。この時期の作について彼自身は後年「露骨にゴッホ風な描き方をしたものだ」と反省したが、当時の青年画家たちに与えた衝撃は大きかった。明治末期・大正初期の非自然主義絵画の隆盛を象徴する作品といえる。1912年の個展 (琅玕洞) 出品作と推定されている。松方三郎 (松方幸次郎の弟) 旧蔵、森村義行 (松方三郎の兄) 旧蔵。 取得額 : 50,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定
27		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : 虎の門風景 制作年 : 1912 (明治45) 年 材質・形状 : 額／画布、油彩 寸法 : 32.0×41.0 cm 解説 : 劉生がゴッホ風の絵を連作した時期の代表作だが、1911年1月の《夕陽》に比べると同年3月の本作品は、色面を強調する平坦な筆致においてはむしろゴーギャンの影響を窺わせる。渡欧の経験がなく、西洋絵画の実物に接する機会も乏しかった劉生の、雑誌や画集のみで画家たちの色彩や筆致を学び取って消化してみせる巧みさがよく表れている。1912年の個展 (琅玕洞) 出品作と推定されている。森村義行 (松方幸次郎の弟) 旧蔵。 取得額 : 50,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定

28		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : 外套着たる自画像 制作年 : 1912 (明治45) 年 材質・形状 : 額／画布、油彩 寸法 : 41.1×31.8 cm 解説 : 数多い劉生の自画像の中で最も重要な作品。文芸誌『白樺』を読んでポスト印象派に魅了され、白樺派の人々と出会って「第二の誕生」ともいわれる感化を受けた彼の、ゴッホからの影響の色濃い新画風は、外光派をアカデミズムとした日本の洋画界において青年画家たちに鮮烈な印象を与えた。そうした明治末期の非自然主義絵画表現の出現を象徴する作品である。1912年の個展 (琅玕洞) 出品作と推定されている。森村義行 (松方幸次郎の弟) 旧蔵。 取得額 : 100,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定
29		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : 居留地 (築地明石町) 制作年 : 1913 (大正2) 年 材質・形状 : 額／画布、油彩 寸法 : 31.5×41.5 cm 解説 : 1911年1月の《夕陽》がゴッホ風、同年3月の《虎の門風景》がゴーギャン風であるとすれば、翌年作と考えられる本作品にはムンクからの影響が認められる。文芸同人誌『白樺』と出会って以降の劉生の、西洋美術の新動向、新思潮に対する彼の食欲な関心の広がりが見える。鍋本清方の《築地明石町》と同じく画面の奥には船の帆が見えて、築地居留地の情趣を表している。森村義行 (松方幸次郎の弟) 旧蔵。 取得額 : 30,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定
30		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : (表) 自画像／(裏) カインとアベル 制作年 : 1913 (大正2) ／1914 (大正3) 年頃 材質・形状 : 額 (両面作品) ／板、油彩 寸法 : 41.1×34.0 cm／30.6×38.7 cm 解説 : 短期間にゴッホやセザンヌから影響を受けた劉生は、やがて北方ルネサンス絵画から感化を受けるようになった。その変化を窺わせる本作品《自画像》は、裏面に宗教画《土を愛するカイン》が描かれていることから、劉生の著『劉生画集及藝術観』所載の「作品年表」に記載された作品であるのは明らかであり、ゆえに彼自身の自信作だったと判断する。なお、この宗教画の図像は東京国立近代美術館所蔵《「人類の意志」下絵》にも見出される。 取得額 : 20,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定
31		種別 : 油彩 作者名 : 岸田劉生 (1891-1929) 作品名 : 水浴童子 [習作] 制作年 : 1914 (大正3) 年 材質・形状 : 額／画布、油彩 寸法 : 44.7×33.7 cm 解説 : 1914年の劉生の個展で発表されたルネサンス風の作品《水浴せる三人の子供》の習作。個展に出品された完成作の方は、劉生の全画業でも最大規模といえる100号もの大作で、「クラシックの感化」を強く受けた時期の代表作だったが、当時の画壇では酷評された挙句、大阪の高津中学校へ納められたのち戦災で焼失した。その佛を伝えるこの習作の現存は極めて意義深い。森村義行 (松方幸次郎の弟) 旧蔵。 取得額 : 20,000,000円 展示予定 : 新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展 (令和4年1月29日-3月6日) で展示予定

32		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：エターナル・アイドル 制作年：1914（大正3）年 材質・形状：額／板、油彩 寸法：40.8×31.8 cm 解説：聖母マリアを描いた宗教画。少年時代には数寄屋橋教会の田村直臣の下で牧師を志したこともあった劉生が、宗教画を盛んに制作した時期の作品。劉生の著『劉生画集及藝術観』において「クラシックの感化」を強く受けた代表例として《水浴せる三人の子供》とともに挙げられた作品で、実際この聖母はレオナルド・ダ・ヴィンチ《岩窟の聖母》を反転させたような姿をしている。1919年、白樺十周年記念主催岸田劉生作品個人展覧会（日本電報通信社、京都府立図書館）出品作。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：20,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
33		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：路傍 制作年：1915（大正4）年 材質・形状：額／板、油彩 寸法：32.5×23.0 cm 解説：過去の展覧会では《鵠沼風景》と呼ばれていたが、1915年5月という制作時期から、当時居住した代々木の風景を描いたと考えられる。新興住宅地として造成された郊外の坂道の赤土の表現は、同年11月の名作《道路と土手と塀（切通之写生）》（東京国立近代美術館）や翌年6月の《門と草と道》（京都国立近代美術館）を予告すると見られる。1915年、現代の美術社主催第1回美術展（読売新聞社）出品作《路傍》と推定されている。 取得額：20,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
34		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：壺 制作年：1917（大正6）年 材質・形状：額／画布、油彩 寸法：40.9×31.7 cm 解説：劉生の静物画における初期の名作として、1916年4月の《壺》（下関市立美術館）、同年11月の《壺の上に林檎が載っている》（東京国立近代美術館）に続く翌年4月の作。明暗の対比を和らげ、筆致を抑制している点で先行2作品との違いが明らかであり、静謐な画面は「実在」をめぐる探求の純粋化を物語る。鵠沼居住時代の劈頭を飾る名作。1917年、第4回草土社展（玉木商会）出品作。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：120,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
35		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：壺と林檎と茶碗 制作年：1917（大正6）年 材質・形状：額／画布、油彩 寸法：34.3×34.3 cm 解説：劉生の静物画制作において「壺」3部作に続く新展開の始まりを告げた作品。それまで壺と林檎のみを描いてきた劉生がここでは林檎にガラス瓶と茶碗を組み合わせている。静物画に多彩なモチーフが取り入れられた最初の試みであり、その後の変化に富んだ静物画群の出発点となったという意味でも注目される。1917年、草土社第5回展（三会堂）出品作。松方三郎（松方幸次郎や森村義行の弟）旧蔵。 取得額：120,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定

36		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：鵠沼風景 制作年：1917-23（大正6-12）年 材質・形状：額／画布、油彩 寸法：44.1×51.5 cm 解説：劉生は1917年から1923年までの間、神奈川の鵠沼に住んだ。肺結核（のちに誤診と判明）の療養のため東京から移住し、関東大震災に被災して京都へ移住するまでの間、初めは静物画制作に没頭し、やがて愛娘の麗子を描き続けることになったが、窓の外に見える鵠沼の風景を描くことも多かった。本作品も窓外風景の一つと見られるが、窓の下を見下ろす角度を採っているのが珍しい。裏面の墨書から、支援者の一人だった大阪の久米利助のため制作したと考えられる。 取得額：10,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
37		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：芝居絵（大安寺堤） 制作年：1923（大正12）年 材質・形状：額／板、油彩 寸法：24.0×33.0 cm 解説：劉生の妻、秦は鎗木清方の門人で、歌舞伎の愛好家でもあり、その影響で歌舞伎の鑑賞に没頭するようになった劉生は、鵠沼居住時代末期には芝居見物絡みの絵をいくつか制作した。1922年、東京の京橋にあった新富座で「大安寺堤」を鑑賞した際の様子を翌年に描いたのが本作品で、舞台上の役者は中村雁治郎（初代）。浮世絵や歌舞伎への関心から、東洋の美を探求し始めた時期の作品である。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：30,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
38		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：鎌倉長谷夜景 制作年：1923（大正12）年頃 材質・形状：額／板、油彩 寸法：14.6×22.0 cm 解説：劉生遺作展には1928年作《長谷夜景》として出品され、以後《鎌倉夜景》や《鎌倉長谷夜景》へ題を改められ、制作年についても近年は1928年ではなく1923年頃と改められている。画中の看板には「御みやげ」の文字が見えることから、1922年7月の平和記念東京博覧会の売店夜景スケッチとの関連も想定され得る。そうして点も含めて今後の研究課題を提供する興味深い作品である。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：30,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
39		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：舞妓図（舞妓里代之像） 制作年：1926（大正15）年 材質・形状：額／板、油彩 寸法：27.0×21.7 cm 解説：劉生が京都の南禅寺草川町に住んだ時期の油彩画。宋元画や初期肉筆浮世絵の収集に没頭し、研究と執筆に明け暮れ、祇園の茶屋遊びにも夢中になり、油彩画をあまり制作しなかった時期だが、そこから立ち直ろうとして制作したのが本作品。浮世絵や歌舞伎に没頭する中で見出した東洋の「卑近美」を「でろり」と形容した彼の美学を象徴する作とも見られ、彼の画業を考えるとき欠かすことのできない代表作である。1927年、第1回大調和美術展出品作。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：200,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定

40		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：静物（果物） 制作年：1927（昭和2）年 材質・形状：額／画布、油彩 寸法：33.4×52.8 cm 解説：関東大震災後、京都へ移住していた劉生が、洋画家としての活動をやり直すため、鎌倉へ移住して翌年の作品。京都居住時には宋元画を意識した静謐な日本画を盛んに制作し、やがて南画の奔放な筆致を学ぶようになったが、それを油彩画に取り込んだのが本作品。地面と壁の境目を描いて背景に立体感をもたせた点には、西洋絵画を綿密に研究した劉生ならではの空間の感覚が表れている。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：20,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
41		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：静物（ギヤマン皿の静物） 制作年：1928（昭和3）年 材質・形状：額／画布、油彩 寸法：31.0×49.0 cm 解説：鎌倉へ移住して以降の劉生が油彩で描いた静物画には、ギヤマン（カットガラス）による西洋風の器を描き込んだ作品がいくつかある。本作品では、ギヤマンの皿にギヤマン盃を組み合わせ、苺や蜜柑とともに、劉生が好んだ冬瓜や林檎、椿を添えて優美にまとめている。宋元の花鳥画風ではなく西洋風の静物画だが、筆致は南画風で、劉生の画業における新展開を感じさせる。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：20,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
42		種別：油彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：大連星ヶ浦風景 制作年：1929（昭和4）年 材質・形状：額／画布、油彩 寸法：60.0×74.0 cm 解説：劉生の生涯における唯一の海外渡航となった晩年の大連滞在は、旧知の松方三郎の尽力で、南満州鉄道による招聘という形で実現した。西洋へ行く資金を稼ぐという目的を果たすことはできなかったが、現地で制作した油彩画は今までにはなかった明るい色彩を見せ、彼が新境地に達しつつあった可能性を感じさせる。中でも本作品は、穏やかに明澄な色彩を見せ、愛娘の麗子や友人の武者小路実篤から絶賛されてきた。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：80,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
43		種別：素描 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：永遠の女性（聖母像） 制作年：1918（大正7）年 材質・形状：額／画布、木炭 寸法：53.1×40.9 cm 解説：聖母マリアを描いた宗教画。愛娘の麗子によると、劉生は少年時代、数寄屋橋教会の田村直臣の下で牧師を志したとき、その娘に対して初の恋心を抱いたらしく、聖母像にはその儼が投影されているとのことである。本作品もその一つと見ることができる。表情の描写にはレオナルド・ダ・ヴィンチの影響が窺え、木炭画ながらも完成度が高い。1918年、草土社第6回展（赤坂溜池・三会堂）出品作。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：20,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定

44		種別：水彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：麗子裸像 制作年：1920（大正9）年 材質・形状：額／紙、水彩 寸法：50.5×33.6 cm 解説：劉生の画業は、愛娘の麗子を描くことで全盛期を迎えたと評されることが多い。写実を通して「内なる美」に達しようとした彼にとっては、最も凝視に値する対象が麗子だった。そうした数多く制作された麗子像の中でも異色作がこの半裸像であり、赤い裳を着けた姿は中世の聖徳太子二歳像に因んだとも伝えられ、西洋美術から東洋美術への関心の移行を反映している。1920年の個展（流逸荘）出品作。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：150,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
45		種別：水彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：二人麗子 制作年：1921（大正10）年 材質・形状：額／紙、水彩、コンテ 寸法：22.7×30.4 cm 解説：愛娘の麗子を二人に分身させて描いた作品としては1922年3月の油彩画《二人麗子図（童女飾髪図）》（泉屋博古館分館）が有名だが、これはその1年前の、1921年3月30日の水彩素描。同日、フェノロサの本を読んで浮世絵に感心した劉生は、風俗画の小品を描いてみようかと考えたことを日記に書いた。これはそこからの初発の構想を描き留めた作品であるとも考えられる。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：15,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
46		種別：水彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：二階窓外之景（秋景） 制作年：1921（大正10）年 材質・形状：額／紙、水彩 寸法：25.5×34.0 cm 解説：画中の署名によると1921年10月5日の風景画である。劉生の日記には、同日、風景画を制作するため外出したところ雨が降り出したため諦めて帰宅し、家の2階の窓から見える景色を描いたことが記されている。約1ヶ月後の11月2日に加筆して完成させたことも日記から判明する。水彩による鵲沼風景画としては最も有名な作品といえる。1921年の個展（流逸荘）出品作。森村義行（松方幸次郎の弟）旧蔵。 取得額：10,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定
47		種別：水彩 作者名：岸田劉生（1891-1929） 作品名：自画像 制作年：1928（昭和3）年 材質・形状：額／紙、水彩、鉛筆 寸法：50.2×34.0 cm 解説：亡くなる約1年前の劉生の自画像であり、数多い彼の自画像の中でも、南画を除けば恐らくは最後の作と見られる。概ね鉛筆のみで描かれ、一部に水彩を施している。日本画制作に没頭した京都在住時代を経て鎌倉へ移住したのちの作ではあるが、写実の腕の確かさは鵲沼在住時代の自画像や麗子像と比較しても、衰えを見せない。第2回大調和美術展出品作。松方三郎（松方幸次郎の弟）旧蔵、森村義行（松方三郎の兄）旧蔵。 取得額：15,000,000円 展示予定：新収蔵記念 岸田劉生と森村・松方コレクション展（令和4年1月29日-3月6日）で展示予定

48		種 別	：	水彩
		作 者 名	：	ソニア・ドローネー＝テルク（1885-1979）
		作 品 名	：	リズム
		制 作 年	：	1915-30（大正4-昭和5）年頃
		材 質 ・ 形 状	：	額／厚みのある白い紙、水彩
		寸 法	：	46.5×30.0 cm
		解 説	：	本作品は、20世紀を代表する女性アーティストのソニア・ドローネー＝テルクが、夫ロベールとともに「Simultané（シミュルタネ：同時性）」と称する色彩研究の過程で制作した作品である。最も豊かな表現要素である色と基本的な造形要素としてのかたちが様々に対比され、組み合わせたり、同時に展開することで作品に動きがもたらされる、という彼女の考えと試みがよく現れた優品。
		取 得 額	：	8,140,000円
		展 示 予 定	：	令和3年度第2回コレクション展（令和3年6月24日～8月29日）の「西洋近代美術作品選」コーナーにて展示予定
49		種 別	：	水彩
		作 者 名	：	アーシル・ゴーキー（1904-1948）
		作 品 名	：	バースデイ・グリーティング
		制 作 年	：	1931（昭和6）年
		材 質 ・ 形 状	：	額／紙、水彩、墨、色鉛筆
		寸 法	：	25.3×19.0 cm
		解 説	：	アーシル・ゴーキーは、オートマティスムや抽象表現主義の先駆とされるアルメニア出身の画家。本作品は、彼が若き日の模索時代に、モダン・アートの動向を学んだ画家ダヴィット・ブルリュークの50歳の誕生日に送ったバースデイ・カードである。ゴーキー独自のシュルレアリスムの描線と形態が顕著であると同時にユーモアを感じさせ、画家同士の温かな交友を示す佳品となっている。
		取 得 額	：	8,470,000円
		展 示 予 定	：	令和3年度第2回コレクション展（令和3年6月24日～8月29日）の「西洋近代美術作品選」コーナーにて展示予定
他 2 0 点／計 6 9 点 購入総額：1,363,985,800円				